

平成26年度教師海外研修(ガーナ) 研修報告書

学校名	名古屋市立大杉小学校	氏名	服部 秀子
-----	------------	----	-------

1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私のガーナ研修に対する目的は、日本の子どもたちに「他国を知ることを通して、日本を知る機会」を提供するための材料を収集すること。そして教師の道を志したきっかけであった「児童労働」の現状を自分の目で確かめることだった。日本とガーナの相違点の中にも同一点が見つげ出すことのできる資料を多く得たこと、また日本とガーナのつながりである協力隊や専門家、日本企業の活躍を直接見ることでできたので、前者の目的は達成できたと思う。後者においては、その現場を目の当たりにすることはなかったが、児童労働が独立した問題ではなく、何かの原因となった結果であることに気がついた。どうなると児童労働が起こりうるのかを考え、社会の様子や構造に意識を向けることができたので、今後、授業で「児童労働問題」を取り上げる際は、断片的な知識だけを伝えないよう配慮したいと思う。なので、本来の目的は達成されなかったが、見出した発見的な解釈は、これから様々な場面で生かしていけると思うので、達成感は大きい。

2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

ガーナで特に印象的だったのは「挨拶を重んじる」ところだ。挨拶といっても「おはよう・こんにちは」程度ではなく、会話をすること。自分のこと、天気のこと、家族のことなどを話し、みんなとコミュニケーションを図る。一日がおしゃべりで終わる日もあるそうだが、それができないと、ガーナで信頼関係は築けないとのことだった。生きていく上で、人とのつながりがいかに大切かを熟知しているからこそできる行為だと思った。とともに、経済発展をしてきた多くの国が失ってきた財産だと気付いた。

また、ガーナ人は陽気でフレンドリーと本には書いてあったけれど、実は消極的で、初対面では冷たい人も何人もいた。ガーナは貧しい、お金を欲しがっていると思われるがちだが、トイレを貸してくれたガーナ人はチップを受け取らなかった。肯定的に出会うためには、「あらゆる先入観は持たないこと」。これを体験から学んだ。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

本研修ではガーナで働く日本人にたくさん出会った。日本から遠く離れたガーナで、これまで培ってきた経験や能力を生かして働いている姿はとても逞しかった。でも誰もがその逞しさの裏に、人知れぬ苦勞があり、それを隠しながら、絶え間ない努力をしていた。そんな彼ら彼女らのように頑張ってくれている人がいるから、国と国がつながっていけるのだと思い、感動した。「人が国をつなげている」と学んだ。

またガーナの先生たちに、「なぜ教師になったのですか?」という質問をした。「子供が好きだから」「教育で子供を救って、国を助けたいから」などの答えが出てきて、日本の先生たちと考え方が同じで驚いた。ガー

ナの教師はモチベーションが低いと言われているが、なぜ自分が教師になったのかの理由は、どの先生も真剣に答えてくれた。国は違っても、同じ教育者として、未来を願って戦っているのだと分かったら、自分も日本の恵まれた環境に甘えることなく、頑張っていこうと思えた。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

多くの途上国開発や支援では、現地の人々が自立的に現金収入を得られるようになる事を目的としている。農業や稲作など、どの分野でも難しい課題が山積しているが、国を思い働くガーナ人との出会いや、JICA 職員や専門家、協力隊の方々が懸命に働く姿は、未来への希望に見えた。しかし、私はもっと大きな課題に気付いた。それは「お金を得た先の幸せ」である。日本はお金もモノも十分にあるが、自殺者数は世界上位である。何をもって「豊かな国」というのは、いつも疑問だった。私は、世界中のどの国もいまだ「お金を得た先の幸せ」を掴めていないと思う。だからこそ、発展はしたけど方向性を見失った国と、これから発展し方向性を見直すことのできる国が、共に考え、乗り越えていかなければならないと思った。少子高齢や無縁社会は日本だけの問題ではなく、世界と繋がって考えていかないといけないと改めて実感した。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

今回の研修で、教育を変えるには、教師が変わらなければいけないと強く思いました。なので、教師に対する研修を、今後も展開しつ続けてほしいと思いました。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

④-2 現地の方の自宅でのバンクー作り体験

青年海外協力隊のホームステイ先で、バンクー作り体験をさせてもらった。バンクーは、フーフーと見た目は以ていて、キャッサバとトウモロコシを発酵させたものを混ぜたものである。ホームステイ先のお母さんが、庭で火を焚き、鍋に入った白いスープ状のバンクーを、大きな杓文字でかき混ぜていた。しばらくするとバンクーは、お餅のようになり、そうなる混ぜにくくなったため、鉄の棒で鍋を支え、その棒を足で押さえていた。当然、棒も鍋も熱いはずなのだが、お母さんは直に触っても平気そう。簡単そうに混ぜていたけれど、実際やってみるとすごく難しかった。食事の支度はかなりの重労働であると感じた。少し酸味があるバンクーだが、食べやすく、何よりバンクーを入れるスープ（シチュー）が絶品で飲み干した。ガーナでは仕出し弁当やスーパーのお惣菜も買ったが、やっぱりガーナでも家庭の味が一番おいしいと思った。水汲みや荷物を頭に乗せる体験もでき、ガーナの人々の実生活を体感できる貴重な時間だった。(服部秀子)

⑧ JICAボランティア、専門家との懇談会

青年海外協力隊、シニア海外ボランティア、専門家の方々と中華料理店で懇親会を行った。それぞれの活動場所やバスの中でもインタビューはしてきたが、食事の場ではさらに深くお話を聞くことができた。活動内容や実績を聞いているだけでは、彼らはただただ優秀な人たちであり、私にとっては遠い存在だった。でもこの

懇親会で、現在に至るまでのキャリアステップや苦労話を聞き、みんな平坦な道りを経ているわけでないことに、親近感が沸いた。高い志を持ちながらも、現地の現実に挫折したことや、投げ出したくなるような体験をしていた。多くの葛藤がありながらも、ブレない信念を持ち、自分を奮い立たせてやってきたことを聞き、心から感動し、勇気もらった。場所や向き合う課題が違って、彼らも私も同じように世界を良くしようと頑張っている仲間なのだと感じる事ができた。日本の子どもたちに、「世界のために、一生懸命働いている日本人がたくさんいるんだよ」と伝えたくなった。(服部秀子)

⑮ 太陽光パネルプロジェクト

野口研究所の電力のほとんどを賄っているという太陽光パネルの設置現場を見学した。鳩山政権時代、太陽光推進の舵が切られ、6. 1億円の費用を投入し設置されたものだ。1機・2機合わせて、720KWの電力を供給でき、これは年間1千万円以上の電気代に相当する。日本企業が監督・指導者となり、現地企業に委託する。現場では、やはりガーナ人と日本人の仕事に対する考え方の違いがあり、現地スタッフが時間を守らない、仕事を覚えてないなどの苦労話を聞いた。ここでも日本人の細やかさ、勤勉さなどの強みが活かされていると思った。

電気の需要に供給が追いついていないガーナで実際に電気にアクセスできるのは、人口の約半分。供給率を上げる努力はしているが、都市部でも2, 3日に一回は停電する中で、農村部への配電も進めているため、供給と需要の差はなかなか埋まらないのが現状のガーナでは、太陽光の技術が役立つと思った。(服部秀子)

⑯ チョコレート工場

チョコレート工場と聞くと、ファンタジーな外観を想像していたが、実際は鉄格子の付いた高い壁に囲まれ、所々黒く汚れた灰色のコンクリートでできた大きな建物が聳え立っていた。最初に、カカオ豆からチョコレートにしていく工程を説明してもらい、カカオ豆の皮やココアバターの実物を見せてもらった。ガーナのカカオはクオリティが高く、食べ物の大会で賞ももらったと話す姿から、本当にカカオに誇りを持っているんだなと感じた。また、生産するチョコレートには現地用と輸出用の2つがあり、現地用は高い気温でも溶けにくいチョコレートであるということには驚いた。工場見学では白衣を着て、頭にはネットを被って見学した。印象的だったのは、機械がある場所に全く人がいないということ。ある程度は、コンピューターで管理されている様子だったが、きちんと品質管理がされているのかに疑問は残った。なかなか見学できるものではないので、写真撮影ができなかったのが、何より残念だった。(服部秀子)

● ガーナの移動途中

ガーナでの研修を振り返るにあたって、バスの中の出来事は絶対に外せない。バスの移動中は、本当に様々なことをしていた。食事や睡眠だけでなく、歌の練習、研修の振り返り、ケープコーストの世界史講座など、移動中は仲間との絆を深める時間でもあったと思う。4～5時間の移動でも、嫌な思いをせず、お腹が痛くなるくらい笑ったり、真剣に語り合ったりできたことは、かけがえのない思い出である。またガーナではバスが止まる度に、多くの物売りに囲まれる。最初は少し怖かったが、手を振れば振り返ってくれたし、ジュエチャ

一で会話をすることもできたので、ガーナ人とコミュニケーションを取れる機会にもなった。そして何よりバス移動は、私たちにガーナの様々な風景を見せてくれた。都心から農村に向かう町並み、緑豊かな森や凸凹道、立ち並ぶお店、棺桶屋など、研修先だけでは見えないガーナの人々の暮らしを見ることができた。(服部秀子)

● その他印象に残ったエピソード（どんなに疲れていても、ワークショップ）

毎晩、行ったワークショップ。疲れて、頭がうまく働かないこともあったけど、あのワークショップがあったからこそ、学びから多くの「気付き」を得ることができたと思う。ただ見学して、知識を増やすだけの研修とは得られるものが全く違う。その日の研修を振り返り、自分の思いを整理し、仲間の考えを聞くことで自分の考えを深めることができた。研修に合わせて用意された毎日違うアクティビティや、研修をより深いものにしてくれたマナビノオト。これが、JICA 中部の教師海外研修はすごいと言われる所以だと思った。(服部秀子)

5. 印象に残る写真2点 とその解説

● 写真1…ファイル名 [FRK_4293]

◇キャプション： ガーナでの最後の集合写真

◇解説文：

ガーナでの最終日。最後の任務であった報告会を終え、JICA 事務所前にて撮影。肩の荷が下りた様子で、みんな満面の笑顔。全員が無事に研修を終えるというミッションを達成した一枚。

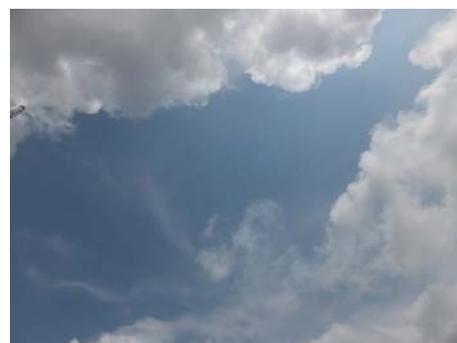


● 写真2…ファイル名 [HTR_2480]

◇キャプション： ガーナの空

◇解説文：

研修時期は雨季。10日間の滞在中、青空を見ることができたのは数回。雲の切れ間から現れたガーナの青空は一段と綺麗に見えた。でも当たり前だが、日本の空と何も変わらない。どんなに遠くても、同じ空に下だった。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

今回の経験から何よりもお勧めする持ち物は、日本の非常食です。現地食がお腹に合わないためか、日程の半分以上、お腹の具合が悪く、みんなに非常食を分けてもらっていました。荷物の重量制限もありますが、お腹に少しでも不安がある方は、多めに持っていくことをお勧めします。私は、なごやん、フィナンシェ、お粥、ぶどう糖で生き延びました。あと、ワークショップは消せるボールペンだと便利でした。

また現地での写真撮影については、できるだけ自分を入れて撮影してもらうことが大切だと思います。子供たちに見せる時に、先生が写っていることでその世界を身近に感じられるので、良いと思います。

授業の予定や教材化の準備は大切です。しかし、準備のし過ぎも良くないかなと思いました。行ってみなけ

れば分からないことがたくさんあって、その場で感じる学びが最も生きた知識となりました。準備に追われて、体調を崩すことだけはしないようにしてください。

7. その他全般を通じての感想・意見など

この研修に参加させてもらえたこと、本当に感謝しています。教員には様々な研修がありますが、これほどまでに実践的で、価値観を揺さぶられるほどの学びを得られる研修は数少ないと思います。これだけの研修を企画・準備した方々のご苦勞は参加者にも伝わってくるほどでしたが、ぜひこれからも続けていていただきたいと思っています。ただ一つだけ心配なのは、今回、小学校での交流の場で現地の子供が怪我をするという事故がありました。ご迷惑をお掛けした方々に本当に申し訳ないと思っております。この事故があったことで、次年度の研修に何かしらの制限が出てこないかを危惧しています。本研修において、あの小学校での交流がかけがえのない経験となった先生はたくさんいます。次年度以降も、子供たちとの交流の機会が確保されることを願っています。

以上